

# 駒ヶ根市中沢地区の魅力 再認識する住民と学生たち

若年層の流出を中心とした人口減少に伴い、過疎化が進む駒ヶ根市中沢地区。地域の魅力を再認識し、活性化を計る活動の一環として9月10日(木)から13日(日)まで3泊4日の日程で、首都圏の大学生らを地域に招いての「中沢地区魅力発見調査」が行われた。



上が大曾倉地区で下が中沢地区。自然豊かな農山村地域はまさに「里山」と呼ぶにふさわしい。若年層の流出を止めるのはだれなのか...

学生との交流を通じ  
地域の魅力を再発掘

9月10日(木)、千葉県の江戸川大学社会学部 鈴木輝隆教授とゼミ生、LD(ローカルデザイン)研究会メンバーを中心とした計24名の調査隊が駒ヶ根市中沢地区を訪れた。彼らの目的は「中沢地区魅力発見調査」。同地区の住民有志19名からなる「中沢地域づくり委員会」と共に、地区の現状を調査し、魅力を発掘するという県下でもめずらしい試みだ。

メンバーは「人材・特技・物語」「景観・スケッチ」「かたち・デザイン」「食べ物・伝統・創造」「商品づくり・産業」「映像」のグループに分かれて地域を巡り、さまざまな視点からのフィールドワークを実施。その後、議論、作業、デザインワークを行い、最終日である13日(日)には地域住民を集めての中間報告会が開かれた。さらに、来年2月にはこれをふまえての具体的な活性化策の報告会が予定されている。

「今回の活動の目的は地域外の若者らのストレートな視点から客観的な評価を受けることで、中沢地区の住民に地域資源の再認識をってもらうことにあります」と、駒ヶ根市役所産業振興部商工観光課の小原昌美さん。住民が地域価値を改めて学ぶことで、

自分たちが今後何をすべきかを考えるきっかけにもなり、意識改革につながるのでは、と考えたのだ。

地域活力の低下に歯止めを  
ここで暮らす意味を考える

事実、過疎化が進む地域において、最も怖いのは「地域活力」の低下。こうした地域では「何もない場所だもんで、若い衆が出て行ってもしょうがないな」という諦めに近い言葉を耳にするが、果たして、本当にそうなのだろうか。ならばその地で暮らす意味とは一体なんなのか？

実際に暮らす人びとが地域の魅力を改めて実感し、確固たる「想い」を持つことが、ひいては若者をこの地に留まらせ、企業や人材を引き寄せるきっかけにもつながる。むしろ、それを分かりやすくデザインし、伝えることも課題となるだろう。今回のプロジェクトの経過は、同様の問題を抱える多くの過疎地域にとっても大きな指針となりそうだ。

次号では、実際に行われたフィールドワークの模様をお伝えする。

1.とれたての野菜を中沢地区の皆さんからいただく 2.拠点となった中沢支所の調理場で地元の主婦らが交代制で腕を振った。3065人の総人口に対し、実に1割にあたる人々が今回の活動に参加。地域住民の意識の高さを伺える  
3・4.江戸川大学のゼミの学生たちによる「中沢にコレがあったら住みたい」と題しての熱気を感じられるディスカッションの様子。学生たちにはアイデアがいっぱい浮かんでくる 5.8名のLD研究会メンバーには、香川県坂出市職員、学生、編集者など顔ぶれはさまざま  
6.氷見山水車で話しを聞く 7.4日間の日程の3日目の夜。学生たちの議論は尽きることがない 8.今回の調査の立役者、江戸川大学の鈴木輝隆教授。地域の情報を編集。ローカルは限りなく面白いと語る

